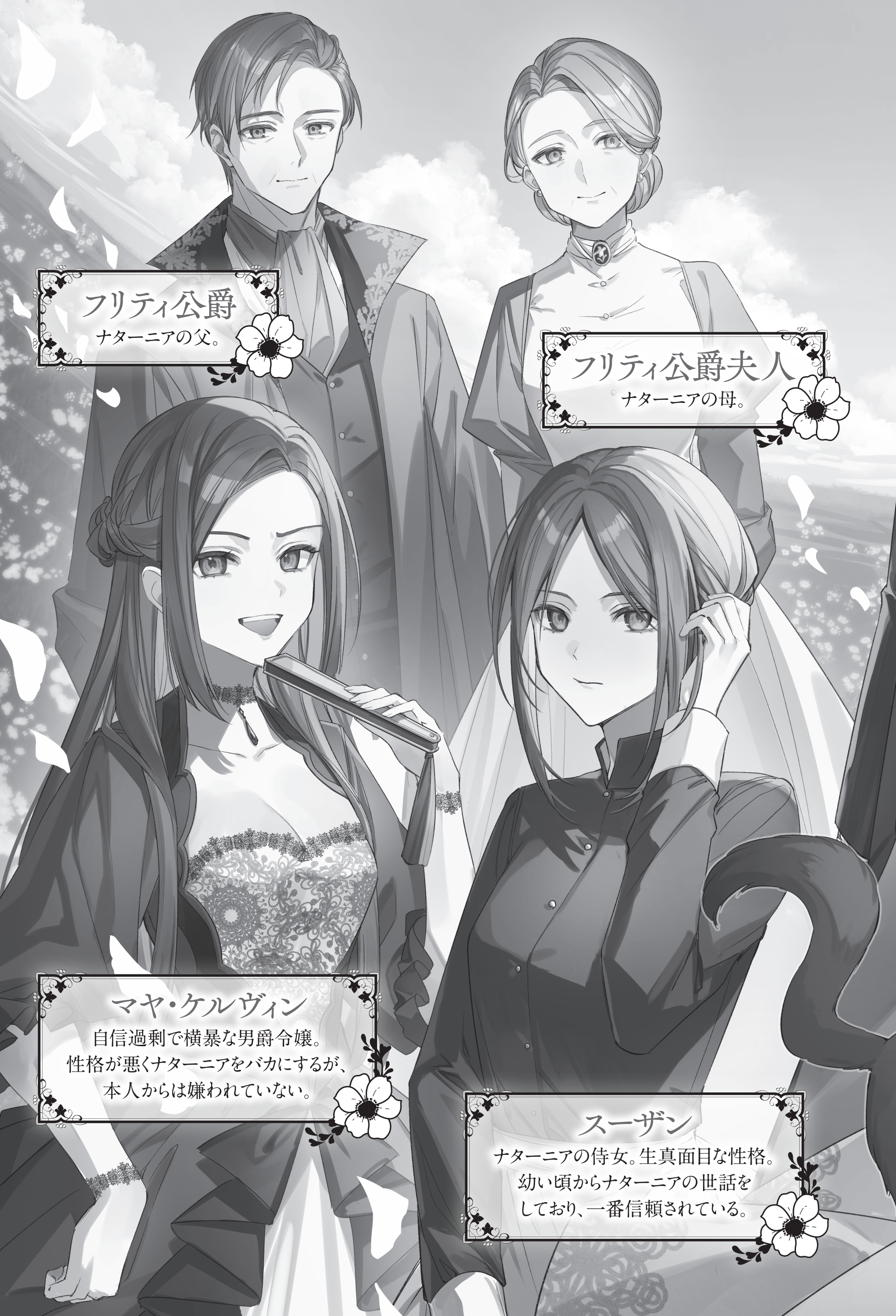
幽霊になった侯爵夫人の最後の七日間

Character
アシェル・ロンド
冷淡さで有名な侯爵。
嫁いできたナターニアにも
冷たく接していると
思われていたが……。
ナターニア・ロンド
若くして亡くなり幽霊に。
おっとりとした雰囲気だが、
意外と図太く頼もしい性格。
アシェルのことが大好き。
お猫さま
幽霊になったナターニアの
前に現れた黒い子猫。
天然なナターニアに
鋭いツッコミを入れる。


フリティ公爵
ナターニアの父。
フリティ公爵夫人
ナターニアの母。
マヤ・ケルヴィン
自信過剰で横暴な男爵令嬢。
性格が悪くナターニアをバカにするが、
本人からは嫌われていない。
スーザン
ナターニアの侍女。生真面目な性格。
幼い頃からナターニアの世話を
しており、一番信頼されている。

幽霊になった侯爵夫人の最後の七日間

0日目 …… 007
1日目 …… 017
2日目 …… 053
3日目 …… 089
4日目 …… 125
5日目 …… 149
6日目 …… 173
7日目 …… 197
?日目 …… 235
番外編1 ある日のメイド会議 …… 243
番外編2 愛おしい日々の続き …… 269
番外編3 小さな黒猫を追いかけて …… 279

0日目

0日目

『――ナターニア。君は死んでしまったんだ』

目の前に、一匹の子猫がふよふよと浮かんでいる。
丸みのある顔はとても小さくて、青色の目はアーモンドの形をしていて。
黒い毛はもふもふ、もふもふーと豊かに生え揃っている。
きっと柔らかくて、とてつもなく手触りがいいに違いない。
一目見て、触ってみたい……と思ったナターニアは、ごくりと唾（つば）を呑む。
今まで、動物に触れたことはほとんどなかった。近くで見たのも数えるほどだ。そんなナターニアにとって、これは大きなチャンスであった。
精いっぱいの勇気を出して、手を伸ばしてみる。
心の中でどうか逃げないでと祈りながら、そぅっと、そぅっと。
（……あら？）
けれど、うまくいかない。
右手と左手。どちらを動かそうとしても、だめだった。

（あらら？）

その理由を考える前に、子猫が口を開いた。

口の間から、鋭い牙が覗く。

『よく聞いて、ナターニア。君はね、死んでしまったんだよ』

そう繰り返すのは幼い少年のように、可愛らしい声。

そこでようやくナターニアは、この声を発しているのが目の前の子猫なのだと気がついた。

舌っ足らずに喋りかけてきたのは、姿を見せていない誰かではなく子猫自身。

（人の言葉を喋る猫さまが、いらっしゃるなんて）

世界は広いのだ、としみじみと思う。生まれてこの方、一度も旅行をしたことがないけれど、きっとこの世界中にナターニアの知らない多くの神秘が眠っているのだろう。

ただ、言葉を操り、何もないところに腰かけるようにして佇む猫は、おそらく一般的な猫ではない。猫の生態に詳しくないナターニアでも、それくらいのことは分かる。

ナターニアは咳払いで喉の調子を整えてから、返事をしてみる。

「まぁ、さようでございましたか」

手が動かせずとも、どこかにある唇は動かせたものだから、ナターニアはほっと胸を撫で下ろした。そもそも死んだということは、手だけでなく胸もないかもしれないが。

『ショックなのは分かる。でも気力を奮い立たせて、現実を直視してほ……えっ⁉』

子猫が大袈裟（おおげさ）に仰（の）け反る。
よっぽど驚いたのか、瞳孔が大きく開いている。
『そ、それだけかい？』
「もちろん驚きはしましたが、生まれつき身体が弱いものですから覚悟はしておりました」
むしろ、今までよく持ったほうだといえる。
（お医者様は、成人を迎えることはできないだろうとおっしゃっていましたし）
エルフの秘薬があれば、いつまでも健康に長生きできたでしょうに——そんな決まり文句を、耳にたこができるくらい聞いてきた。
万能の薬はおとぎ話だけの代物（しろもの）。もしそんなものが実在したならば助かっただろうと、途方に暮れたような顔で何度も言われるほどに、ナターニアは病弱で虚弱な体質だった。
しかしナターニアは昨年成人を迎え、十七歳まで生きられた。
医者も投げた匙（さじ）を一度だけ拾ってしまう程度には、びっくりの奇跡と幸運に恵まれたのだ。
「それにいつか人の命は尽きるもの。わたくしの場合は、それがちょっぴり早かっただけかと」
落ち着き払ったナターニアを前に、子猫は驚いたようだ。ヒゲと尻尾（しっぽ）がぴーんと上を向いて張っている。
『ええぇ……それはさすがに、あっさりしすぎだろう？　泣いたりとか、叫んだりとか、そういうのないの？』

「わたくし、侯爵夫人ですもの。そのように感情を露(あら)わにして、取り乱したりはしませんわ」
えへん、と胸を張ろうとして——やっぱり身体が見つからなくて、ナターニアは苦笑する。
おかしなものだ。今、動かしている唇の感覚もどこにもないのだから。
(そういえば、こんなにたくさん喋って息が上がらないのも初めてです)
死んだということは、今のナターニアは魂だけの状態なのだろうか。身体がないから、息が苦しくなったりもしないのだろうか？
「……そもそも、ここはどこなのでしょう？」
はて、とナターニアは首を傾(かし)げる。無論、傾げるための首だってどこにもないけれど。
目の前には、見渡す限り白いだけの空間が延々と続いていた。なんだか寂しい場所だ、と思ったが口には出さない。
『ここは地上じゃない。後悔を持って死んだ人間が迷い込んでしまう場所だよ』
子猫がぺろぺろと前足を舐(な)めながら教えてくれる。自分を落ち着かせようとしているようだ。
「まぁ、ご親切にありがとうございます」
分かりやすい説明だ。お礼を口にしつつ、子猫を撫でくり回して存分に愛(め)でたいという欲求に駆られるが、相変わらず手が見つからないのが歯痒(はがゆ)いナターニアである。
「では、あなたは神さまなのですか？」
ナターニアの生まれた家は、美と健康の女神イザヴェラの信者一族である。

両親は生まれつき病弱であったナターニアを哀れみ、十七年前、まさに彼女が生まれた日にイザヴェラ教徒になったのだ。

だからナターニアも、敬虔（けいけん）深くイザヴェラ神を崇める信者のひとりということになっている。

しかし神に祈ったところで、身体を苛（さいな）む苦痛は消えないし、寿命だって延びたりしない。それを十七年ぽっちの人生で、ナターニアは誰よりも深く理解している。

（そんな形ばかりの信者に、イザヴェラ神が慈悲を与えてくださるとは思えないけれど）

グルーミングを終えた子猫が、小さな声で答えた。

『……神ではないよ』

「では、天使さま？」

『天使とも厳密には違うんだけど……うーん、なんて言ったらいいかなぁ』

子猫は口元をもにゅもにゅと動かしている。

神でもなく天使でもない、宙に浮く子猫を前にして、ナターニアは質問を変えてみる。

「では、お名前はなんとおっしゃるのですか？」

『その、名前もないんだよねぇ』

子猫が困り果てた様子だったので、ナターニアは両手を合わせる。

やっぱり、手は見つからないままなのだが。

「なら、わたくしはあなたをお猫さまと呼ばせていただきますわ」

子猫――お猫さまは答えなかったが、ナターニアの真意を推し量るように目を細めている。
その硝子玉のような美しい瞳を、じぃっと真っ向から見つめ返してみるが、その中にはどんなに探してもナターニアの姿は映しだされていなかった。
『ナターニアは、本当に……すごく落ち着いてるね』
「そう、でしょうか？」
『そうだよ。とても十七歳の若さで死んだとは思えない』
「うふふ。褒めていただいて光栄です」
『まったく褒めてはいないけど……違うなこれ。落ち着いてるんじゃなくて、この子、アホっぽい……』
「え？　なんでしょう？」
最後だけ、小声すぎてよく聞き取れなかった。
お猫さまがゆっくりと首を横に振る。
『なんでもないよ。それよりナターニア、君の望みはなんだい？』
ぱちくりと瞳をしばたたかせるナターニア。
今さら言うまでもなく両目も見つからないが、それはそれとして。
『言っただろう？　ここに来る人間には後悔があるんだ。ぼくはその後悔を消すために、君に付き合ってあげるのさ』

「あらまぁ！　まぁまぁ！　そうなのですか？」
なんて素敵な話なのかとナターニアは感激した。
まるで子どもに読み聞かせる、優しげな絵本か何かのような展開である。そんな幸運に恵まれたからには、ありがたくこの機会を利用させてもらう所存だ。
もじもじしながらナターニアは口を開く。
「……実はひとつ、思い残したことがありますの」
呟(つぶや)くと、お猫さまはそうだろうというように頷(うなず)いた。可愛らしい猫の姿形をしているのに、その表情は老成しているようでもあった。
ナターニアが何を言いだすのか、すでに予想しているように。
『なんだい？　なんでもいいから、言ってごらん』
促されたナターニアは、意気揚々と伝える。
「旦那さまに、幸せになってほしいです！」
人生に思い残しがあるとしたら、そのひとつだけ。
そう意気込んで伝えたつもりが、お猫さまの反応は芳(かんば)しくない。
『えっと……それって、どういうこと？』
あまりに漠然としすぎていたらしい。
どうやら、願いはもっと具体的に言わなければならないようだ。ナターニアは大慌てになりなが

ら、一生懸命に頭を回転させた。
「ええっとですね、つまりその――そう！」
悩んだ末に、ナターニアは願いを口にする。
「わたくし、旦那さまに再婚してほしいのです！」

1日目

1日目

お猫さまがふわふわと、宙を漂っている。
脳天気に逆さまになって毛繕いをしていたお猫さまは、ナターニアの視線に気づいてか口を開いた。
『気分はどう？』
ナターニアは、そんなお猫さまを見上げたままこくりと頷く。
「大変、良好ですわ」
首を動かすと、結（ゆ）っていない髪の毛が肩にこぼれる。それだけのことを、ナターニアはひどく嬉しく感じてしまう。
（やっぱり身体があるとないとでは、大違いですね）
手を振れて、足が動かせる。口角を上げられるし、こぼれた髪を耳にかけることもできる。あの白いだけの空間では奪われていた身体の感覚が戻ってきたことに、ナターニアは感動を覚えていた。
それに、ちっとも呼吸が苦しくないのだ。死んでしまった今となっては、焼けつくような全身の痛みや、掻（か）き毟（むし）りたくなるほどの胸の苦しみとは無縁でいられるのだろう。
光を透かすピンクブロンドの髪が、ふわりと揺れる。

きらきらと輝くブルーサファイアの瞳に、色白の肌。凹凸の少ない痩せた身体も、間違いなくナターニア本人のものだ。
あのままでは不便だろうと、お猫さまはナターニアを生前の姿に戻してくれた。
ただし以前と違うのは、ナターニアの身体が透けているということ。手のひらを見つめれば、その下の石畳の路まで見透かすことができる。
開いた手の角度を何度も変えながら、手のひら越しに景色を物珍しげに見つめるナターニア。そんな彼女を見下ろして、お猫さまは溜め息を吐く。
『外見だけなら、君こそ天使のように美しいね』
「まぁ、ありがとうございます。お猫さまもとてもお可愛らしいですわ」
『……はぁ』
ナターニアはにこにこしながら本心を伝えるが、お猫さまはますます呆れた様子だ。
——侯爵夫人ナターニア・ロンド。
彼女は一年前まで、公爵令嬢ナターニア・フリティと呼ばれていた。
(そして死んでしまったわたくしは、ただのナターニア)
身体が身軽なのは、もしかしてそのせいなのだろうか。幽霊は、それこそすべての重圧から解放されている。
『それじゃ、行こうか』

「はいっ」
宙を優雅に進むお猫さまに続いて、ナターニアは歩きだす。
ナターニアの生前の後悔を解消するためにと、お猫さまは地上にナターニアを連れてきてくれた。
ちなみに先ほどの空間から、どういう原理で地上に戻ってきたのか――お猫さまは仕組みについて説明してくれたが、ナターニアには何度聞いてもうまく理解できなかった。
ひとつだけ分かっているのは、今から心残りである人に再会できるらしいということだけ。
「うふふ、うふふふ……！」
それを考えるとナターニアは嬉しくて堪（たま）らなくなり、足取りまでうきうきと弾んでしまう。
だがその隣には、ふよふよと浮かぶ黒猫の姿がある。うふふふしていたナターニアは、自分とお猫さまとを見比べる。
具体的には、スカートから伸びる自分の足と、黒くしなやかな四本足とを。
「お猫さま。お猫さまのように、わたくしは身体を宙に浮かせられないのでしょうか？」
『もう少ししたら、自然と浮いてくるんじゃないかなぁ』
「自然と浮いてくる……そういうものなのですね！」
『テキトーだけど』
「ああ、早く浮いてみたいです！」
お猫さまのぼそっとした一言は、宙に浮くより早く浮かれているナターニアの耳には入っていな

い。
『ナターニア。なんか、わくわくしてる？』
「はい、もちろん！」
せっかく幽霊になったのだから、ナターニアだって空を泳いでみたい。それは幼い頃から、ベッドに横たわっていたナターニアが夢想したことでもある。
もし自由に空が飛べたら、どこへだって行ける。何かに囚われることなく、生きることができるはずだと思っていたから。
（自然と浮いてくる日が、楽しみです！）
納得したナターニアは、生きていた頃と同じように石畳を踏んでいく。
――否。
正しくはナターニアが生前こんな風に、侯爵家の庭を散策したことはほとんどない。
庭師が丹精込めて世話をしている美しい庭園を、ナターニアは窓の向こうに見つめるばかりで、その中に自分が入って散歩することはできなかったし、馨しい花の香りを嗅ぐことすら許されなかった。
だから死んでしまった今、こんな形で願いが叶っているのをナターニアは不思議に思うし、幸せだと感じている。
胸いっぱいに吸い込む花々の香りが、全身に染み渡っていく。

『ナターニア、分かっているね。期限は今日を入れて七日間……それが、君に与えられた猶予(ゆうよ)だからね』

前を進むお猫さまが、振り返らずに念押しする。

「はい、お猫さま」

ナターニアは笑顔で頷く。この話は、何回もお猫さまから聞かされていた。

時は少々遡(さかのぼ)る。

「わたくし、旦那さまに再婚してほしいのです！」

そう言い放ったナターニアを前にして、お猫さまはしばらく唖然としていた。

ぽかんと開かれた口の端から、ちらりと白い牙が覗いている。

（ううっ、爪の先でかしかしと擦ってさしあげたいわ……！）

きゅん、とナターニアが胸をときめかせていることを、お猫さまは知る由(よし)もない。

『……ええっと。旦那と離婚したいって？』

どういう聞き間違いだろうか。

「違います。旦那さまに恋をしてほしいのです。もちろん、わたくし以外の人と」

死んだ人間とは恋も再婚もできないので、付け加えずとも当然のことだが。

お猫さまは、そんなナターニアの言葉に眉間(みけん)をぎゅっとしている。

見れば、全身の毛まで逆立っているようだ。どうしてだろう、とナターニアは首を傾げる。
『そんなの、君が気にするようなことじゃないよ』
「いいえ。だってわたくし、あの方の妻ですもの！」
（死んじゃいましたから、わたくし、正しくは元妻！　ですけれども！）
とか思いつつ、毅然と胸を張るナターニア。身体はどこにも見当たらずとも、そういうポージングを取れているつもりである。
「旦那さまのお考えは分かっています。わたくしがいなくなり、きっと今後は妻を娶らないおつもりでしょう。でも人生は長いのです、ひとりで過ごすなんてもったいないですわ」
『…………』
「わたくしのせいで消費されてしまったあの方の人生を、輝かせることができる……そんなお相手を見つけられたら、わたくしも安心して空の国に旅立つことができると思うのです」
ナターニアはお猫さま相手に、熱心に思いを語る。
お猫さまにも本気度が伝わったのか、やがて渋々とではあるが返事があった。
『……分かった。付き合うよ』
「えっ！　まさかお猫さまも再婚相手探しを手伝ってくださるのですか？」
『手伝うわけじゃない、ぼくは君を見張るだけ。目を離して、悪霊にでもなったら困るからさ』
どうやらナターニアは、場合によっては悪霊になってしまうらしい。ならばお目付役にお猫さま

がついてくれるのは、何よりもありがたい。
きっとナターニアはいつまでも、残してきた人たちを心配して地上に留まろうとしてしまうから。
(旦那さまに、死後もご迷惑をかけたりしたくありませんから)
与えられた期間はたったの七日間。
されどナターニアにとってかけがえのない七日間が、始まる。

正門の先にある庭園を抜けると、侯爵家の邸宅前へと到着する。
ロンド侯爵家の屋敷は、広大な森を見守るように置かれている。辺境に大規模な領地を持ち、森を越えた先にある国境付近を守る家門である。
隣国との友好条約が結ばれたことから、国境騎士団の規模は年々縮小されているのだが、侯爵家が要所を守る重要な存在であることに変わりはない。
格式高い煉瓦(れんが)造りの侯爵邸は、ナターニアが一年間という時間を過ごした場所でもある。思いも新たに見上げると、感慨深い気持ちになる。
「わたくしが初めてここに来た日も、今日のように空は晴れ晴れしかったです」
『初めてここに来た日?』

「はい。結婚式の日です」
　一年前の春の日。
　よく澄んだ空気。愛らしい小鳥の声と、揺れる緑の豊かさ。田舎だとしか聞いていなかった辺境の美しさに、ナターニアの心は弾んでいた。
　雲ひとつない空には、数羽の白い鳥が羽ばたいていた。二人の婚姻が祝福されているようだと、嬉しく思ったのを昨日のことのように覚えている。
　ナターニアは笑顔で、それを指さす。
「見てください、お猫さま。あそこに白い尖塔が見えるでしょう？」
『うん。あれは？』
「あちらは礼拝堂ですわ」
　邸宅の向こうに設置された、小さな礼拝堂である。
　礼拝堂はナターニアが嫁入りする際に、彼女の夫となる人が新しく建設してくれたものだ。
　王都や町中の大きな教会で式を挙げようにも、ナターニアは絶望的に体力がない。だから彼は妻のために、こうして家の傍で式が行えるよう準備を整えてくれたのだ。
　だが彼のそんな配慮すら、病弱なナターニアは無下にした。
　式のあと、侯爵邸のダンスホールで行われた披露宴のことである。疲労困憊に陥って熱を出したナターニアは、その場に顔を出すこともできなかったのだ。

隣に新婦のいない新郎を、嘲笑ったり同情する声もあったことだろう。それなのに彼はナターニアを、不甲斐ない、恥ずかしいと責めたりすることもなかった。

「旦那さまは本当に、本当に、お優しい方でした……」

笑みを浮かべて、大切な思い出を振り返る。彼に嫁げたことは、ナターニアにとってこの上なく幸せなことだった。

そんなナターニアの過去の話を、お猫さまはしばらく黙って聞いていたが。

『あ、見てナターニア』

ふと、お猫さまがナターニアを呼ぶ。

礼拝堂から視線を戻したナターニアは、そこで目を見開いた。

両開きの玄関ドアが大きく開いている。そこから姿を見せたのは、従者を連れた屋敷の主だった。

艶めいた黒髪に、長い前髪の間から覗く切れ長の赤い瞳。引き締まった体躯は、オーダーメイドの裾の長いコートが包んでいる。

目鼻立ちが人並み外れて整っており、どこか彫刻めいた印象を与えるが、ときどきの瞬きが、彼は間違いなく人間であると他者に認識させる。

アシェル・ロンド。

記憶にあるよりもどこか痩せて見えるが、見間違うことはない。

まさに自身の夫であるその人を前にして、ナターニアが口にしたのは――。

「か…………かっこいいっ！」

きゅんきゅんきゅーん、と高鳴る胸を、ナターニアは服の上から押さえる。
（あまりにも、あまりにもあまりにもかっこいいです旦那さまっ！）
アシェルという人の、生まれながらの貴族らしい高貴さがにじむ美貌。長い手足。洗練された立ち振る舞い。物憂げに頭上を見やる視線ひとつにさえ、ナターニアはめまいを覚えてしまう。ときめきのあまり。
……しかしそこで。
はてとナターニアは小首を傾げた。
「今、かっこいいと甲高く叫んだのはどなたでしょう？」
『君以外に誰がいるのさ』
半目のお猫さまに呟かれ、ナターニアははっとして喉に触れる。
よくよく考えると、確かに先ほど叫んだ声は自分の声音(こわね)と似ている気がしたのだ。
「そんな！　いいえっ、いいえあり得ません！」
『ど、どうしたの急に』
「だってお猫さま、おかしいのです。こんなに大声を出しても咳が出ない。興奮しているのに身体

のどこも痛くないだなんて！　これは大変なこと、異常な事態なのです！」
『ちょ、ちょっと落ち着いて。どんどん声が大きくなってるから』
こんなことは、物心ついてから初めてのこと。
だが現実だ。確かにナターニアは今、自分の口を使って喋っているのだから。
「ああっ、死んでいるって無敵なのですね！　今ならなんでもできる気がします！」
『いろいろおかしいこと言ってるんだけど⁉』
「ちょっとわたくし、庭を駆け回ってまいります！　お猫さま、止めないでくださいましね！」
『と、止めないけど――ああもうっ、転ばないようにね⁉』
心配するお猫さまの声を背に受けて、ぴゅーん、と風のように石畳を走り抜けるナターニア。
景色がすごい速度で流れていく。咲き誇る花々、庭園の間を流れる細い小川……。
実際はあんよがじょうず並みの速さだったのだが、ナターニアにとっては風になったも同然だ。
（なんということでしょうっ。このわたくしが、こんな風に走れるだなんて……！）
頬を紅潮させながら、足をがむしゃらに動かす。両手で長いスカートの裾を持ち上げて、どこまでも自由に。
生まれてからずっと、こんな風に息せき切って走る日を夢見ていた。
日射しの下を、なんにも囚われることなく駆けてみたいと。
「ああもう、すごいっ、すごいです……！」

興奮しすぎて、感動しすぎて、もう、うまく言葉にまとまらない。
ぱたぱたぱた、とスカートをはためかせながら、邸宅の外周を回ってきたナターニアは玄関前へと戻ってくる。
「お待たせいたしましたっ、お猫さま！」
真っ赤な頬を押さえ、はぁはぁと息を荒らげながらも、ナターニアはにまにまと隠しきれない喜びに口元を緩(ゆる)ませる。
肩で息をする彼女のことを、お猫さまは呆れたような、それでいてどこか温かい眼差しで見つめていた。
「お猫さま。わたくし感激いたしました。このご恩をどうお返ししたらいいのか……！」
目を潤ませるナターニアに、お猫さまはふるふると首を横に振る。
『いや。返さなくて平気だから』
「お猫さまは欲のないお方なのですね」
（わたくしは旦那さまの再婚を応援したい、なんて言ってしまったのに）
そんなナターニアに力を貸してくれて、七日間も付き合ってくれるというお猫さまは聖人か何かだろうか？　ナターニアは本気でそんなことを考える。
『って、遊んでる間にアシェルが出発しそうだけど』
「ほ、本当です！」

いつの間にやら屋根つきポーチに、立派な二頭立ての馬車が停まっている。我に返ったナターニアは慌てて低木の陰に隠れつつ、目を皿にしてアシェルの一挙一動を見守ることにした。

アシェルはやはりどこまでもかっこいい。かっこいいのだが、そこでナターニアは気がつく。

「旦那さま……左腕に、お怪我を？」

頼りなく揺れている左の袖。

それは左手をギプスで固定して吊っているからだ。そのせいか、アシェルは馬車に乗り込むのに少し手間取っている。

（あの怪我、どうされたのかしら？）

ナターニアが亡くなる前日は、特に怪我をしていた覚えはないが……。

（それに、やっぱり少し痩せられた？）

二つの疑問を抱きながらも、ナターニアは進み出ると深く頭を下げる。

「行ってらっしゃいませ、旦那さま」

アシェルはナターニアに見向きもしなかった。

出発した馬車はゆっくりと遠ざかっていき、やがて見えなくなってしまった。

『君の声、聞こえてないよ。姿だって見えてない』

振り返ると、お猫さまはどこか気遣わしげな表情をしている。

黒猫だから表情が分かりにくいかと思いきや、お猫さまの顔は意外に雄弁だとナターニアは思う。

『だから、その……返事がないからってショックを受けることはないからね』
「いえいえ、気にしていませんわ」
『そうなの？　どうして？』
「お見送りをお許しいただいたのは、初めてですもの。むしろ嬉しくて仕方ないくらいです！」
お猫さまが口を噤(つぐ)む。
（いえ、許されたのではなく、今回は勝手にお見送りしただけですがっ）
だとしても嬉しいのだ。これもまたナターニアの後悔だった。
仕事に向かう夫を見送るのは、妻の役割のひとつ。それを果たせない自分を、ずっと情けなく思っていたから。
『そう、なんだ』
暗い顔で呟くお猫さまの声は、はしゃぐナターニアには届かなかった。
気を取り直すように、お猫さまは溜め息を吐くと。
『それにしても妻が夭折(ようせつ)して数日だっていうのに、もう領地の視察に出ていくとは……とんだ冷血漢もいたもんだ』
「お猫さま、難しい言葉をたくさんご存じなのですね」
『まぁね～』
気のない風を装いつつ、褒められたお猫さまはちょっと嬉しそうだ。

『あと補足しておくと、君が生きている人に触れたり、逆に誰かが君に触れることもできないからね』

アシェルや従者、御者たちは一度もこちらを見なかったから、そうだろうとは思っていた。

それに死んだ妻がわーわー言いながら庭を駆けていたら、さすがにあのアシェルも顔を引きつらせていたのではなかろうか。

（それはちょっと、見てみたいかもしれません）

引きつったアシェルだって、きっとかっこいい。

思い浮かべて、ナターニアはくすりと微笑んだのだが、そこで重要なことに思い当たった。

「そうでした！　大変ですお猫さま！」

『声が大きーい！』

無駄に声を張り上げるナターニアに、お猫さまがヒゲをひくひくさせている。お猫さまの声のほうが大きいので、余計ひくひくしている。

「ごめんなさいお猫さまっ、嬉しくてつい。……ええと、それでですね。旦那さまがわたくしの姿を見られず、声も聞けないとなりますと、わたくしはどうやって旦那さまの再婚を応援すればいいのでしょう?」

地上で生活する様子を見守ることしかできないとなると、アシェルの再婚のために打てる手がないということになるが。

『うん、それを説明しようと思ってたんだけどね。――ひとりだけ、このルールに例外を作ることができるんだよ』
満を持して発されたという具合のお猫さまの言葉に、ナターニアはごくりと息を呑んだ。
「例外、ですか？」
『そう。たったひとりだけ、君の願いを叶えるための助っ人を選ぶことができる。その人物には君の声が届くよ。ただし、君の後悔と直結するあの男だけはだめなんだけどね』
一瞬、ナターニアは落胆を覚えて、そんな自分を嫌悪する。
（いやだわ、わたくしったら）
心のどこかで、アシェルと会話ができると……ナターニアがここにいることをアシェルに知ってもらえると、そんな期待をしていたのだろうか？
だとしたら、そんな未練は一刻も早く捨てるべきだ。
（こうしてもう一度、旦那さまの御姿を見られただけでありがたいもの）
お猫さまはたくさんの奇跡をプレゼントしてくれたが、限界はあるのだ。
死んでしまった身で、多くを望みすぎてはいけない。開放的な気分になったからと、自分を律することを忘れてはいけない。
ナターニアにとって、それは難しいことではないのだから。
気を取り直すように、明るい笑みを浮かべてみせる。

『それじゃあ君の後悔を解消するために、最も役立つ人物を指定してもら』
「では侍女のスーザンでお願いいたします」
『早いよ！　熟考っていう言葉を知らないのかなー⁉』
お猫さまは怒鳴る声も可愛らしい。
そんなお猫さまの声が自分にしか聞こえないのが、少し残念だとナターニアは思った。

アシェルを見送ったナターニアとお猫さまが、次に向かうのは屋敷の中だ。
しかしドアはとっくに固く閉ざされている。
「ノックしてみましょうか」
人を呼ぼうと軽く拳（こぶし）を握るナターニアに、お猫さまは首を振る。
『無理だよ。君は物に触ったりもできないからね』
「あら、そうなのですね」
新聞の片隅に載るような些細（ささい）なポルターガイストは、ナターニアには起こせないようだ。
「ではお猫さま、空いている窓を探して侵入しましょう」
『君、病弱な侯爵夫人だったんだよね？』
「使用人のあとを尾（つ）けてこっそり裏口からお邪魔を」
『盗賊みたいなこと言いだしちゃった！　もうっ、ぼくがやってみせるから後ろで見てて！』

と言いながら、お猫さまがふよふよとドアに向かう。

ナターニアは危ない、と手を伸ばそうとした。このままではお猫さまの丸い頭が、ドアにぶつかってしまう――。

と思った瞬間、お猫さまの身体がドアをすり抜けていた。

驚きのあまり、ナターニアは口元を両手で覆う。お猫さまは外と邸宅内を何度も行き来しながら得意げに言う。

『ほら、こんな感じ』

「すっ、すごいです……！」

『君にもできるから、やってみて』

「は、はいっ」

衝撃を受けつつナターニアは、自分もドアの前に立って挑戦する。

ドキドキしながら手を伸ばすと、その手はなんでもないようにドアを通過してしまう。身体が透き通っているから、ドアや壁は難なくすり抜けることができるようだ。

感動したナターニアは、試しに前傾姿勢になってみる。

「お猫さま！　見てみて、こうするとわたくしの頭がドアに生(は)えたかのよう！」

『だいぶ怖いんだけど！　こっち見ないで！』

「腕と足だけのオブジェはいかがでしょう？」

『君、病弱な侯爵夫人だったんだよね⁉』
そんな一悶着もあったが、難なく邸宅内に進入することができた。
もともと自分が住んでいた邸宅を、ナターニアはきょろきょろと見回す。
「わたくしが暮らしていた頃と、あまり変わりありませんね」
分かりやすい変化は、廊下に置いてある花瓶の中身が取り替えられたことくらいか。ナターニアが最後に見たときはストックが飾られていたが、今はピンク色のアネモネに変わっている。
だが数日もすれば花は替えるだろうし、大きな変化とはいえない。
『ナターニアが亡くなったのが、四月十三日。今日は、同じ月の二十七日だよ』
特に隠すことでもないようで、お猫さまがさらりと教えてくれる。
「それですと、ちょうど二週間ほど経っているのですね」
ではとっくに遺体は埋葬されているだろう。すぐ近くの墓所に、ナターニアの身体は眠っているはずだ。
(さて、スーザンはどこかしら？)
協力者としてナターニアが選んだのが、侍女のスーザンである。むしろ彼女以外に、思いつく人物はいなかったといえる。
ナターニアの両親はとても優しい人たちだったが、今は遠く離れた王都に住んでいる。それに虚空から娘の声が聞こえてきたら仰天して、心を病んでしまうかもしれない。

冷静沈着なスーザンなら、そんな心配はないだろう。ひどく驚くだろうが、きっと快く協力してくれるはず。そんな風にナターニアは彼女のことを信頼していた。

三十歳のスーザンは、ナターニアが子どもの頃から面倒を見てくれていた侍女だ。スーザンの家系は薬草の扱いに長けていて、ナターニアのために両親が雇い入れたという経緯がある。

ナターニアにとっては、スーザンの作る薬も重宝すべきものだが、それ以上に彼女の人柄を好んでいる。

侯爵家に嫁ぐときも、スーザンだけは連れていきたいと両親に嘆願したのだが、スーザンは最初からついていく気満々で、ナターニアが何か言う前から手早く荷物をまとめていたものだった。

（スーザンはいつも、わたくしの傍についていてくれたけれど）

スーザンの主な役割は、ナターニアの身の回りの世話と薬の調合だった。

これはナターニアが実家にいた頃から変わらない。アシェルや他の使用人たちも納得して、スーザンにすべて任せてくれていたのだ。

しかしナターニア亡き今、スーザンはどうしているのだろう。他の使用人と同じように働いているのだろうか？

（本当はわたくしが、自分の死んだあとについていろいろ決めておかないといけなかったのに……）

人知れず、ナターニアはしゅんと項垂れる。

遺言のひとつも残さずこの世を去ったのはナターニアの落ち度だ。本来であれば、スーザンの今後について采配を振るっておくべきだった。

数年前に一度、遺書を書いたことはあったが、スーザンに見つかって大目玉を喰らい、しかも最終的に泣かせてしまったという苦い思い出がある。あれからというもの、スーザンから隠れてそういった文書を残すことは難しくなった。

「お猫さま。とりあえずわたくしの部屋に行ってみてもいいでしょうか？」

『もちろん。ぼくはついていくだけさ』

浮かんでいたお猫さまが器用に方向転換して、ナターニアの後ろに続く。

一階の角部屋がナターニアの自室に当たる。貴族の邸宅では、家主や家族の部屋は上階にあるのが一般的だが、病弱なナターニアが行き来に苦労しないようにと特別に配慮してもらったのだ。

（旦那さまは、本当にお優しいです）

彼の気遣いをそこかしこに感じながら、ナターニアは部屋の前に到着する。

深呼吸をするが、ノックする必要はない。ここはナターニアの部屋だったし、第一、今のナターニアではドアに触れることはできないからだ。

それでもどこか緊張しながら、ドアをすり抜けて部屋へと入る。

広々とした部屋だ。南側の窓はカーテンが閉められているけれど、日中は暖かな日が射し、美しい庭が望めるようになっている。

目に優しいクリーム色の壁紙に、敷き詰められた同色の絨毯(じゅうたん)は毛足が長い。花瓶には青いアネモネが生けられている。本棚には分厚い本が並んでおり、部屋の主が読書家であるのが窺える。

その中でも、一際目を引くのは大きなベッドだろうか。体力のないナターニアだから、寝室は別に用意されていない。室内ドアの先にはそれぞれドレッシングルームとドローイングルームがあるけれど、ナターニアがそちらに足を運んだことは数えるほどだ。

だからこの部屋こそが、ナターニアが一年間の大半を過ごしてきた場所だ。

しかしそこには、床に蹲(うずくま)るようにして嗚咽(おえつ)を漏らす人がいた。

お猫さまは一目見てびっくりしたのだろう。困惑した様子だが、ナターニアは何も言えずにそんな女性の姿を見下ろしていた。

赤茶色の髪の持ち主を、ナターニアが見間違えるはずもない。それでも、驚かずにいられなかった。

（………………スーザン？）

まさか、という思いが胸に込み上げる。

付き合いの長いナターニアの前では、スーザンはいつも明るかった。

ナターニアの体調が悪いときは大丈夫だと励ましてくれた。身体の痛みがひどくて寝つけない夜は、手を握って温めてくれた。

そんな彼女の優しさと献身に、どれほど救われてきたことだろう。
だから目の前の光景が、なかなか信じられなかった。
「スーザン、泣いているの？」
口を突いて出た問いに、果たして反応があった。
びくりっ、とスーザンの肩が揺れる。
おずおずと頭が持ち上がる。振り返った双眸は痛々しく腫れていて、そこから幾筋もの涙が伝っていた。
皺ができたお仕着せにも、大量の黒い点が散っている。
「……この、声……ナターニア奥様？」
掠れた声音で口にしてから、スーザンは首を横に振る。
「……私ったら。奥様が恋しくて幻聴まで聞こえるなんてね」
疑われてしまったナターニアは胸に手を当ててアピールする。
「幻聴じゃないわ。わたくしよ、わたくし」
『ちょっと詐欺っぽいなー』とお猫さまが小声で嘯いている。スーザンは鼻を鳴らして、自嘲気味に笑みをこぼしていた。
「奥様のお荷物をまとめたら、こんな家さっさと出て行くのに。馬鹿みたいだわ」
「待ってスーザン、それは困るわ。わたくしね、あなたに頼みたいことがあって」

「――さっきから、なんなの？」
忌々しげに呟き、立ち上がろうとするスーザン。
ふらふらと危なっかしい侍女に、ナターニアは手を貸そうとしたが、差しだした手は呆気なくスーザンの身体をすり抜けた。
（あ――、）
分かっていたはずなのに。
それでも、静かな衝撃に胸を衝かれた気がした。
「悪魔が囁いているなら、やめてちょうだい。奥様の声を使って私を誘惑しないで」
両手を組んだスーザンの身体は震えている。
支えてあげたいのに、とナターニアは、半透明の自分の手のひらを見つめる。
この身に余る奇跡ばかりが、起きたりはしない。声は届いても、目に見えない幽霊からの呼びかけをスーザンはちっとも信じてくれない。
「ナターニア奥様はもういない。私は光を失ったの。分かっているから、放っておいて。これ以上何も言わないで」
「放っておけないわ、スーザン」
「やめて！」
聞きたくないというように、スーザンは髪をかき乱している。

そんなスーザンを目にして驚いたのだろう。お猫さまがナターニアのほうを振り返った。
その視線を受け止めて、ナターニアは瞳を揺らす。
（スーザンを協力者に選んだのは、わたくし）
うまく説得しなければ、アシェルの再婚に向けて力を貸してもらえない。
けれど――それだけではなくて。
（スーザンに、前を向いてもらいたい）
主のいなくなった部屋で、泣き続けていたスーザン。
きっと昨日も、一昨日（おととい）も、その前だって同じだ。この二週間、スーザンは延々と泣き続けていたに違いない。
彼女の涙を拭ってやれないのが、ナターニアには口惜しい。
同時に、そんな彼女をこれ以上泣かせてはいけないのだと強く思う。
「ねぇスーザン、後悔ってひとつじゃないわね。旦那さまだけじゃなくて、あなたのこともとっても心配だもの」
スーザンが訝（いぶか）しむように首を傾げれば、彼女の髪もわずかに揺れる。
三十歳になるまで結婚もせず、文句のひとつも言わず、スーザンは傍にいてくれた。手のかかるナターニアの看病のために、いつだって自分の幸せは後回しにして。
「わたくしとあなたしか知らないとっておきの思い出話を、一から百まで披露することもできるけ

れど……でも、そんなんじゃスーザンは納得しないわよね。人の大事な思い出を踏みにじるな、この悪魔め！　なんて言って、暴れちゃうかもしれないわ」
「…………」
「スーザン。あなたが辺境までついてきてくれて、どれだけ嬉しかったか分かる？　わたくしあのとき、小躍りして感謝を伝えたかったのだけど、身体が弱いからそういうわけにもいかなかったのよね。でも今ならどんなダンスだって踊れるわ」
『それ、ぼくしか見られないけど大丈夫？』
顔を上げたスーザンが、辺りを見回している。
表情からして、どうやらお猫さまの声も聞こえたようだ。邪気のない少年の声が聞こえたからか、固く張り詰めた表情がわずかに緩み始めている。
「スーザン、これはお猫さまの声よ。お猫さまというのは、わたくしをここまで案内してくれたとっても親切な黒い子猫さまなの」
ふっ、とスーザンの口元が、笑みの形に歪(ゆが)む。
「スーザン？」
「……猫に敬称をつける人なんて、他にいません」
涙を拭ったスーザンが、正面を見つめる。
協力者であるスーザンにも、姿までは見えていないはずだ。